創刊にあたり

本多　浩

真贋の区別のつかぬ狂乱の時代である。有名人が学長に就任すると受験生が増え、大学の教壇に芸能人がたち、大学の附属図書館の一般への公開等々、正にこの世は……という時代。勿論、大学が象牙の塔であってはならない。国民に大学は門戸を開かねばならないし、社会の要請に答えなければならない。しかし、世に衒い、大学が大学としての見識を失ってはならない。大学とはなにか、学問とはなにか、私たちはそれを問われているし、また私たちもこの時代にどのような目的を目ざすべきか、反省をこめて熟慮しなければならない。

語学、文学は直接社会の役にはたたない。文学部を卒業しても人の命を救うべき術は学ばなかった。機械を作りうる力も身につけることはない。登山中、遭難した時、万葉集を読んでも命は助からない。一片のチョコレートが命を救うことはあろうが。

語学、文学を学び研究することは、この社会において何の意味があるのか。無用なのである。無用の用が忘れ去られている時代において、無用のものに関わるのも必要ではなかろうか、人、天邪鬼と言うとも。

徳島大学国語国文学会設立にともない、その機関誌として本誌を創刊した。巷には諸々の雑誌が発行されている。いまさらの声なくはない。二十一世紀を展望し、ささやかながら思うことを書き残すことができれば幸いである。